

# 『乳ガン患者の光線療法の継続の意義』

## 【考察】

ガンという病気に罹患すると、治療、仕事、家庭などさまざまな問題が生じてくるが、日本女性のガンの第1位である乳ガン患者でもさまざまな苦悩を抱えていることが知られている。

例を挙げると、以下の問題などがある。

- ① 身体面として手術による乳房の喪失、変形、疼痛
- ② 治療面として化学療法（抗ガン剤治療や放射線治療など）による吐き気、嘔吐、食欲不振、脱毛などの副作用
- ③ 社会面として休職、失業、家庭内での役割変化
- ④ 実存面として人生の意義の再考

このようにガン患者が受ける苦悩はこれらの一つひとつが大きなストレスであり、そのストレスにより不安、抑うつなど精神疾患の発症につながることも多いといえる。精神症状は日常生活だけでなく、治療に対して負の影響を与えることが判明している。

### 1. 冷え

からだの冷えは血行不良、免疫機能の低下につながり、とくに中枢温の低下は今回の2例では予後不良であった。光線療法により37℃以上の中枢温を呈した6例では気力が出た、抗ガン剤の副作用が少なかった、脱毛が早く回復した、転移が消えたなどの効果がみられた。

### 2. 心身不調症候群（視床下部－下垂体－副腎皮質系の活性化）

ガン患者には非特異的な症状とされてきた倦怠感、不安、抑うつ、慢性疼痛などの症状は、心身不調症候群といわれる。これらの身体的症状、精神的症状といえる体調不良は、向炎症性サイトカインの上昇によって起こることがわかってきている。さらに手術、抗ガン剤治療、ストレスも向炎症性サイトカインを誘導するのでこれらによっても心身不調症候群が引き起こされることになる。慢性疼痛（頭痛、関節痛など）や冷えも心身不調症候群の一部であり、痛みや冷えは相互に増悪させるのでその対策は非常に重要である。光線療法には深部温熱作用や強力な抗炎症作用があり、向炎症性サイトカインを減らして体調を早く回復させることができる。

とくに術後の回復過程においては光線療法を行っている例では早く、抗ガン剤投与時には**副作用軽減作用**が患者からよく報告される場所である。

### 3. ビタミンD

ビタミンD不足は乳ガンリスクの上昇と乳ガンの予後不良と関連すると言われていた。今年の米国乳腺外科学会でも血中ビタミンD濃度が低い乳ガン患者は予後が悪いことが報告されている。一方、ステージI～IIIの化学療法中の乳ガン患者にビタミンD 400IU/日とカルシウム 1000mg/日を1年間投与して血中ビタミンD濃度の変化を検討した報告では、15%の例でビタミンD濃度は低いままであったことが示された。このことから化学療法中のビタミンD状態の改善には、推奨される投与量より増やすことが重要であることが報告されている。ビタミンD状態の改善には光線療法では最低1日1時間前後の治療が必要と考えられる。

#### 4. 乳房切除後疼痛症候群 (PMPS)

乳ガン切除後に持続する疼痛、知覚障害は乳房切除後疼痛症候群と呼ばれ、患者にとって大きな問題である。厚生労働省研究班の調査（日本癌治療学会誌第40巻2号1-11,2005）では、術後経過8.8年の976人のうち、疼痛が遷延している患者は約22%にみられ、さらに66%の人がPMPSの治療をあきらめていることが報告されている。海外の研究（JAMA,302(18)1985-1992,2009）でも、術後47%の人が持続的な疼痛、知覚障害に悩んでいることが示されている。光線療法は光、熱エネルギーによる深部温熱効果で患部の血行改善、創傷治癒作用などによって傷の治癒を促進し、痛み、つっぱり感など不快な症状を軽減させ効果がある。また、患側肩関節の動きの改善にも光線療法は有用である。

#### 5. リンパ浮腫

乳ガン手術で腋窩リンパ節を郭清したり放射線治療を受けると患側上肢にリンパ浮腫がみられることがある。リンパ浮腫の根治療法がない現在、症状の程度が重い場合には患者の苦痛は大きい。光線療法は血行改善とリンパ系の流れをよくしリンパ浮腫改善に寄与することができる。

#### 【結論】

以上、乳ガン患者に対し光線療法は以下のように患者の各症状に幅広く対応でき患者の生活の質の向上に寄与できることが示された。

- ①手術、化学療法、放射線治療に伴う冷えや血行状態を改善
- ②自然治癒力を促進させて手術の傷の治癒促進
- ③傷の痛みや転移の痛みの軽減
- ④抗ガン剤の副作用軽減
- ⑤ガンの縮小

乳ガンは手術後10年たってからの再発もまれにあり、また転移例ではいかにガンと上手に共存するかが大事である。そのためにも光線療法の多彩な作用を発揮させるために治療の定期的な継続が望ましい。